

II-1-3

「鯨の町」と太地町立くじらの博物館の創設

太地町立くじらの博物館
櫻井 敬人

はじめに

商業捕鯨の10年間モラトリアムが1972年に国連人間環境会議で勧告されるおよそ3年前の1969年4月、太地町立くじらの博物館が開館した。人口が4500人程度の太地から、250人を超える男たちが南氷洋に出漁していた1960年代初め、町の経済は大きく捕鯨漁業に依存していた。日本はノルウェーを抜いて世界最大の捕鯨国になったが、間もなく国際捕鯨委員会は捕獲割当頭数を急激に減らし、やがて反捕鯨運動が世界的に大きくなろうとしていた。捕鯨が衰退するとき、「鯨の町」の人々は「くじらの博物館」にどのような期待を込めたのか。

「海洋レジャーセンター」への変貌

太地町立くじらの博物館の発案者は、1957年から17年間に渡って町長を務めた庄司五郎氏であると考えられており、博物館の玄関横に彼の胸像が建てられている。『太地町史』は以下のように述べている。

「博物館の建設計画については、前町長庄司五郎氏の発案によるもので、同氏は、常に、わが国の捕鯨がその技術の近代化するにしたがい、古式捕鯨に関する資料がだんだん失われ、国民から忘れられようとする実情をいたく憂い、わが国捕鯨の発祥地であるこの太地町に、捕鯨に関する資料を網羅してそれを展示し、かつ鯨類の生態を研究調査するための施設と設備を建設しようとする強い念願が、この博物館の建設の運びとなったのである¹。」

庄司氏が町長に就任した頃、太地町の経済は南氷洋捕鯨に大きく依存していたが、庄司氏は近い将来に捕鯨活動が急激に制限されることを予想していた。町の生き残りのために観光産業の育成が必要であると考えた庄司氏は、海岸部のほとんどが吉野熊野国立公園特別地域に指定されている町全体を「海洋レジャーセンター」あるいは「海洋レジャー都市」に変貌させる計画を立てた。庄司氏は水産業界誌に寄稿し、以下のように述べている。

「今の漁業を主体としては子孫の将来にまでわたる安定と繁栄は望むべくもない。果たしてこのままで良いのだろうか？私は十数年前に既にこのことを予想し町民が明日を豊かに生きぬくためにいかに町づくりをすべきか懊悩した。（中略）清浄な大気と紺碧の海、そしてリアス式海岸特有の美しさと荒々しさ、これらの特異性を利用して立体的な近代的壮美や風致をこわさず新時代

の要求するリクレーションの場として提供する。そして町民がこれらに依存して生活を営むという、いわゆる相互扶助の精神が、私の町の明日の支柱とならねばならないと思った。陸上にはゴルファーあり、ハンターあり、ドライバーあり等々これら観光とむすびつけた海洋レジャーセンターを計画したのである²。」

面積が6平方キロメートルに満たない町全体を海洋レジャーセンターにするという庄司氏の都市計画において、観光施設が集中しているのは町の東北部に位置する常渡地区であった。元は磯だった場所が1966年12月からおよそ3年かけて埋め立てられ、約4万坪の造成地が出現した。完成予想図には、たくさんのホテル、プール、マリナー、マリントワー、そしてヤシの並木道が見える。(図1)

何もない造成地に真っ先に建設されたのは、屋久島から取り寄せた椰子の木が並ぶ道路と「くじらの博物館」である。(図2) 町立くじらの博物館は来館者数を順調に伸ばし、初年度に29万人、翌年度に34万人、翌々年度には39万人を超えた。

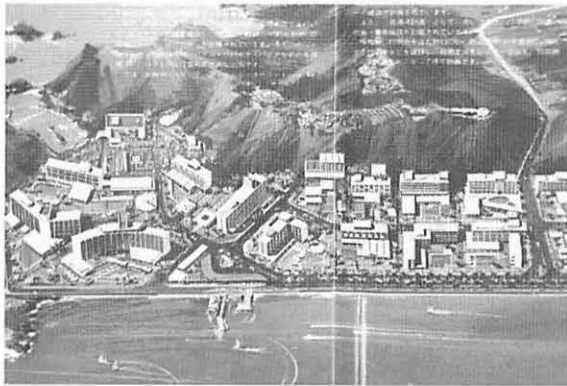


図1 海洋レジャーセンターの完成予想図(太地町立くじらの博物館所蔵)

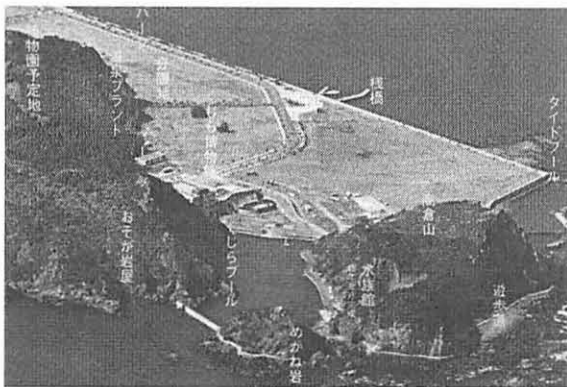


図2 造成地に真っ先に建設された太地町立くじらの博物館(太地町立くじらの博物館所蔵)

1971年3月にマリナリウム(海洋水族館)が、1973年5月には、別の地区にあった熱帯植物園も博物館に近い場所に新規開園した。このときに常渡地区のすべての観光施設を含む場所の総称として採用されたのが「太地くじら浜公園」である。庄司五郎氏はそれから約1年後に亡くなる。造成地の大半を占めていたホテル用地に期待されたほどの数のホテルは建設されなかったが、くじら浜公園には捕鯨船資料館(1978)やラッコ館(1988)などが加えられ、1990年代まで観光地として大いに賑わった。

マリナランド

庄司五郎町長が策定した「海洋レジャーセンター」の計画書のなかで、太地くじら浜公園が命名される以前、すでに建設されていた町立くじらの博物館と、建設が計画されていた熱帯植物園や海岸遊歩道、マリナなどを含む場所はしばしば「マリナランド」と呼ばれている。太地くじら浜公園という構想に、カリフォルニアやフロリダで人気を博していたマリナランドやマリナワールド、シーワールドなどと呼ばれる大型水族館施設が影響を与えていたからであろう。町立くじらの博物館が開館する前年の1968年5月、NHK総合テレビの番組中、庄司町長は以下のように発言し、フロリダ州マイアミにおける鯨類飼育の取り組みに関する知識があったことが分かる。

「太地の町に次の産業は何があるのかということになりますと、私は観光しかないと思います。(中略) 少なくともクジラを追いこんだりすることは、来年中にはきちんと完成させます。鯨を生け捕っても普通のところではできない。鯨の習性もよく知っていますからね。海に飛び込んで鯨に縄をかけて縛ったり、あるいは鯨と泳いだり、ということはおそらくよそのところではできない。この町の連中はそういうことが簡単にできる。だから私が夢を持てるわけです。これに一万人の能力があるホテルも建てて、ゆっくり眺めてもらいたい。皆さん方からすれば大きな話のように聞こえると思うのですが、少なくともマイアミの海岸などでそういうことやっていますからね。そういう先鞭を太地が付けたい。日本の観光は非常に遅れています。世界観光に打って出ても恥ずかしくないようなものにしたい。太平洋の舞台を背景にした、でかいものをこさえたいと思っています。とにかく見ていて下さい。世界一のものをこさえたいと思います³⁾」

マイアミの海岸にあったのは、マイアミ水族館 (Miami Seaquarium) である。1966年から日本でも放映されたテレビドラマ番組「わんぱくフリッパー」の撮影が行われた場所でもある。(図3)

庄司町長がマイアミを訪ねた証拠を筆者は知らない。しかし、庄司氏が町立くじらの博物館の開館の2年前、1967年に南カリフォルニアを訪ねていることが明らかになっている⁴⁾。当時、南カリフォルニアにはマイアミ水族館と並んで有名なマリナランド・オブ・ザ・パシフィックと、シーワールド (サンディエゴ) があった。イルカやシャチのショーで人気を博していたこれらの施設を庄司氏が視察した可能性は高い。なぜなら庄司氏には同行者がおり、それが東京大学海洋研究所教授の西脇昌治博士であったからである。



図3 マイアミ水族館で撮影された「わんぱくフリッパー」の宣伝広告 (勇魚文庫所蔵)

西脇博士は、当時の鯨類学を体系化して1965年に『鯨類・鰭脚類』（東京大学出版会）を著し、1969年から始まった大規模な淡水イルカ国際学術調査を8年間に渡って陣頭指揮した、日本を代表する鯨類学者であった。西脇博士は、江の島水族館が日本で最初の鯨類飼育専用施設として1957年5月にオープンした江の島マリナランドの立役者でもあった。江の島マリナランドの建設に先だって、西脇博士はアメリカの複数の水族館施設を訪問調査しており、江の島マリナランドの鯨類飼育プールもカリフォルニアのマリナランドのそれを模して、西脇博士が設計している⁵。町立くじらの博物館のイルカショープールも同様であった⁶。

西脇博士は、町立くじらの博物館開館直後に雑誌に寄稿して、庄司氏を「大胆不敵でユニークな男である」と評し、「鯨の研究を生涯の仕事とする者にとって、自分の構想による鯨のための博物館の展示を考えてくれという話は、ことわれるわけにいくものではなかった」と記している⁷。西脇博士は、「鯨の町」を標榜して奔走する庄司町長からの協力要請を意気に感じ、また庄司氏も、アメリカで発達したマリナランドを日本で最初に導入することに成功した西脇博士を信頼していた。町立くじらの博物館は和歌山県下で最初の登録博物館である。博物館法は登録博物館に専門職員として学芸員を置くことを義務付けているが、くじらの博物館の初代学芸員は、他ならぬ西脇博士であった。

アメリカ村

西脇博士と庄司町長が1967年に南カリフォルニアを訪問したとき、二人を現地で歓待したのは、アメリカに住む太地関係者であった。明治20年代から太地をはじめ紀伊半島の漁村から大勢の人々がカリフォルニアに移住しており、彼らが最も集中していたのが、ロサンゼルス港の一角にあったターミナル・アイランド、あるいはイースト・サンピードロと呼ばれた人工島である。1910年頃から缶詰工場が稼働すると、工場の社宅に約3000人の日系人が暮らすコミュニティーが生まれた。そのうちの大半が紀伊半島の漁村出身の一世と、現地で生まれた二世だったのである。男は沖でイワシやマグロを追い、女は缶詰工場で昼夜なく働いた。サンピードロ日本人会が結成されたとき、最大の規模を誇った同郷会が太地人会で、例えば1935年に撮影された、毎年実施されたピクニックの際の集合写真には285人が写っている。1930年代、アメリカに加えて、カナダやオーストラリアからの仕送り金の総額は町役場の年間予算の5倍にも上った。日本の教育を受けるために太地に送り出された海外生まれの子供が、太地小学校には常時60人程度いたという。

日米開戦によってターミナル島の日本人村は消滅したが、強制収容所から戻った元島民の多くは戦後もロサンゼルス近郊に暮らした。太地人会は戦後に太地人系クラブと名を変えて活動を続け、故郷太地を支え続けた。町立くじらの博物館のオープンの2年前にカリフォルニアを訪ねた太地町長一行を歓待したのも、マリナランド・オブ・ザ・パシフィックやシーワールドのイルカショーを8ミリカメラで撮影し、フィルムを町立くじらの博物館に寄贈したのも、在米太地人系クラブのメンバーだったのである。太地と南カリフォルニアを行き来する大勢の人の中に、庄司五郎氏の親族も含まれていた。庄司町長は、アメリカのマリナランドの情報を在米の太地人から聞かされていたはずである。

「捕鯨発祥の地」

初代学芸員の西脇博士は、太地町立くじらの博物館の展示を設計するに際して、屋外のプールでイルカやゴンドウクジラなどを飼育展示するマリナンド的な機能に加えて、屋内の1階と2階で鯨類の骨格標本や胎児、臓器、餌、寄生虫などの液浸標本、様々な鯨類の実物大模型などを展示する自然科学館としての機能も大きな柱としていた。展示の目玉として意識されていたのが、3階まで吹き抜けになっている館内に天井から吊り下げられた実物大のセミクジラの模型と、その原本である、政府の特別許可を得て捕獲された全長15メートルを超えるセミクジラの骨格標本であろう。(図4) こうした鯨類に関する生物学的な展示部分の製作に西脇博士と彼の薫陶を受けた人々、例えば現在名誉館長の大隅清治博士など、当時の鯨類学者の大きな貢献があったことは言を待たない。



図4 実物大のセミクジラ模型

もうひとつ、太地町立くじらの博物館には大切な顔がある。人と鯨のかかわり合いの歴史を考察する捕鯨史博物館の顔である。屋内三階部分は、古式捕鯨の銚、勢子船の破片や模型、捕鯨絵巻、様々なスタイルの捕鯨砲など、捕鯨の歴史資料を展示している。太地町が「鯨の町」と並んで標榜する「捕鯨発祥の地」であることを裏付けるはずの歴史資料を展示する場所として「くじらの博物館」を位置づけたのも庄司五郎町長であった。西脇博士が庄司氏の頼った「鯨博士」とあるとすれば、庄司氏の「捕鯨史博士」は橋浦泰雄氏ということになる。

庄司氏が町長に就任して最初に着手したことのひとつは、捕鯨史編纂委員会の立上げであった。民俗学者橋浦泰雄氏を執筆担当者とし、庄司町長が代表を務め、元教育長で初代館長となる東玉次氏が委員長を務める捕鯨史編纂委員会は、庄司町長就任の翌年、1958年9月から活動を始めた。橋浦氏は民俗調査のために戦前から紀南を訪れており、1952年にはおよそ一年間、太地からほど近い湯川温泉の宿に滞在して民俗調査と作画に従事した。このときの日記が鳥取県立図書館に寄贈されており、庄司五郎氏と橋浦氏がおそらく二回目に出会ったときのことが記されている。庄司五郎氏の父親である庄司楠五郎氏が組合長を務めていた太地水産共同組合に頼まれて、大漁をして帰港する定置網船団の様子を描いた「生産愛郷之図」と題された絵が製作されたのもこのときのことである⁸。庄司五郎氏と橋浦氏は、庄司氏が町長に就任する以前から親しい関係にあったといえよう。

捕鯨史編纂作業に目処がついた1965年11月、庄司氏は公民館の広報紙に次のように記し、後に創設される町立くじらの博物館を捕鯨史編纂の成果の一部として明確に位置づけている。

「捕鯨史が七年がかりで橋浦泰雄先生の犠牲的奉仕によって脱稿の喜びをみるに至りました。これを基礎にして世界に冠絶した捕鯨史館、できればクジラプールなどを造りたいと思っています⁹。」

庄司氏が言う「クジラプール」は、4年後に完成する町立くじらの博物館の鯨類飼育展示施設、後に庄司氏が「マリンランド」と呼ぶようになる施設の一部に相当するのであろう。「できればクジラプールを造りたい」という言い方が示唆するように、庄司氏はまず捕鯨史編纂作業に取り組み、その活動が、庄司氏の言う「捕鯨史館」、つまり太地の捕鯨史を扱う歴史博物館の創設につながり、また捕鯨史を編纂しながら太地の都市計画を考えるうちにマリンランドのアイデアを温めるようになったということではないだろうか。

1965年11月、捕鯨史編纂委員会は、B6判207頁、ソフトカバーの『鯨に挑む町』を平凡社から出版した。『鯨に挑む町』は、捕鯨史編纂委員会が出版のために準備していた原稿の簡約版、あるいは「大衆版」として出版されたものであった¹⁰。収集資料の量が膨大で、当初想定していたよりも大きな企画になることが判明したため、取り急ぎ低費用で出版しなければならなかったからである。杉並区久我山に家があった橋浦氏は1964年から2年間に渡って太地に滞在し、「最後の二〇〇日あまりは、私にはほとんど夜も昼も休日のけじめもない毎日¹¹」を送って、『鯨に挑む町』を世に出した。A4判662頁、布装丁、別冊捕鯨絵巻6巻が付いた豪華本、『熊野太地浦捕鯨史』が限定千部で平凡社から出版されたのは、『鯨に挑む町』の出版からさらに4年後、くじらの博物館の開館を1ヵ月後に控えた1969年3月のことであった。橋浦氏は、出版に漕ぎ付けるまでの最後の3年間は、「疲労と持病の神経痛で臥床する日が多かった¹²」という。

『熊野太地浦捕鯨史』が出版されたときには81歳になっていた橋浦氏だが、太地を頻繁に訪ね、また長期間滞在して、まだ辛うじて残っていた古式捕鯨の経験を有する古老からも聞き取りを重ねた。鯨を網に掛け、鉾で突き取る際の複雑な作法に加えて、刃刺はその子息でなければ継げなかったこと、一人前の刃刺しになる前に「刺水夫」として父親以外の刃刺のもとで修業を積むこと、陸でも刃刺の付き人として四六時中仕えなければならず、それが辛かったことなど、最後の刃刺たちの肉声を書き留めることに成功している。

散在していた太地の捕鯨資料は『熊野太地浦捕鯨史』に収録され、町立くじらの博物館に収蔵された。これらはレプリカの勢子船や鉾、旗、捕鯨ジオラマなどと一緒に常設展示されてきた。町立くじらの博物館は、太地の人々が誇る古式捕鯨の栄光を讃える記念碑としても機能してきた。

「過去・現在・未来、くじらに関わる町」

捕鯨が衰退しようとしていたとき、太地町長に就任した庄司五郎氏は、太地が「捕鯨発祥の地」であることを確かめるために捕鯨史編纂委員会を立ち上げた。さらに観光立町を宣言し、町全体を「海洋レジャー都市」に変貌させる計画を立てた。その中心に位置付けられていたのが1969年4月2日に開館した町立くじらの博物館であった。本館1階と2階で鯨類の自然科学資料を、3階で捕鯨の歴史資料を展示し、屋外では、アメリカで人気を博していたマリンランドのスタイルを取り入れた鯨類の飼育展示を行った。開館から20年ほどの間は来館者が多かったのも、観光客に憩いの場を提供すると同時に町民に就労の場を提供するという目的を果たしてきたと考えられてきた。しかし後半の20年間、来館者数は下降を続け、2009年度は14万人を下回った。観光施設としての存在意義を問われるようになった太地町立くじらの博物館は、その社会教育機関とし

での存在意義を問われている。

太地町立くじらの博物館の開館から20年後、太地町に「国際鯨類研究センター」を設置する構想が練られた。水産庁遠洋水産研究所所長の大隅清治博士（現太地町立くじらの博物館名誉館長）や、町企画振興課長の北洋司氏（元太地町立くじらの博物館館長、現太地町教育長）、その他に県庁関係者、大学教授、作家などで構成された調査委員会は、構想書のなかで、町立くじらの博物館は「国際鯨類研究センター」のなかで重要な役割を果たすものとしているが、その現状は「優れた基本構想と所蔵品を擁しながら、くじらの博物館は、20年前の開設以来ほとんど進歩を見せていない」と報告し、「このまま放置されれば、日本一の鯨の博物館ということも看板だけのものとなり、遠からず社会教育機関としての生命を失ってしまうことであろう」と警告している¹³。

さらに20年が経過し、2009年4月で太地町立くじらの博物館は開館から40周年を迎えた。創設者の故庄司五郎町長が手本事例の一つとして言及したマイアミ水族館のイルカ飼育員は飼育環境下にある鯨類の解放運動に転じ、ついには彼の太地における抗議活動を大きく扱ったドキュメンタリー映画が2010年のアカデミー賞を獲得するに至った。鯨類飼育展示施設の在り方に関する議論が活発になっている今のような状況を、40年前に太地の人々は予想しただろうか。

企画展示室を持たない太地町立くじらの博物館の常設展示は、40年の間に大きな変化を見ることはなかった。温度、湿度、照度を適切な値に制御することができない博物館展示室のガラスケースの中で40年間にわたって展示されていた捕鯨絵巻は色褪せ、極彩色の意匠が岩絵具で施された古式捕鯨時代の鯨舟の木片は黴に覆われてしまった。大小の銚や捕鯨砲も、資料データベースが存在しないため由来がほとんど失われてしまった。20年前に警告が発せられていたにもかかわらず、資料を体系的に収集し、保存し、研究、展示するという博物館の基本的な活動が疎かになっていたといわざるを得ない。博物館開館時から残る最後の職員で、現在館長を務める林克紀氏は2009年に行われたインタビューで以下のように述べている。

「庄司町長が亡くなった後、情熱も進歩もなく、なんとなく続けてしまった。庄司町長が描いた夢が途切れてしまっていました。でも、5年前、那智勝浦町との合併話を断ってからくじらの博物館を見直そうという動きが生まれた。スタッフの意識改革をしつつ、ソフト面の充実を図っているんです¹⁴。」

太地町立くじらの博物館は、日本を代表する鯨類学者を2005年に名誉館長として迎え入れた。次に鯨類飼育を専門学校で学んできた20代の飼育員たちを採用し、飼育統括責任者として鴨川シーワールドのベテラン飼育員を招聘した。さらに獣医師を一名、人文科学担当学芸員を一名、自然科学担当学芸員を一名、飼育鯨類担当学芸員を一名、新たに採用した。専門性をもった人材を広く町外から採用して専従させる人事は過去にはなかったものである。

人と鯨の関係が大きく変化するなかで、観光客を惹きつけるために、また社会教育機関としての使命を果たすために、「鯨の町」の「くじらの博物館」もまた変化する。変わらないのは、太地の人々が鯨に何らかの関わりを持ち続けようという意思である。2006年に策定された太地町の長期総合計画に新しく謳われた町のキャッチフレーズのひとつは、「過去・現在・未来、くじらに関わる町」であった。

注

- 1 太地町史監修委員会『太地町史』1979年、692頁
- 2 庄司五郎「我が町の生きる道」『水産世界』1969年2月号
- 3 NHK総合「紀南」『新日本紀行』1968年5月13日
- 4 太地人系クラブ『太地人系クラブ八十周年記念の沿革』1995年
- 5 『採集と飼育』第52巻2号、242頁
- 6 「太地マリナリウムだより」『たいじ』1981年9月
- 7 西脇昌治「鯨の博物館」『月刊百科』1969年11月号
- 8 「生産愛郷之図」は、今は太地町役場応接室に展示されている。
- 9 太地町公民館『鯨波』1965年11月号
- 10 『鯨に挑む町』206頁『熊野太地浦捕鯨史』661頁
- 11 『鯨に挑む町』205頁
- 12 『熊野太地浦捕鯨史』662頁
- 13 『捕鯨基地太地町の再生と国際鯨類研究センター構想』和歌山社会経済研究所、1989年
- 14 山川徹『捕るか護るか？クジラの問題』技術評論社、2010年、163頁